

阪上 孝編

『一八四八—国家装置と民衆』

若原 憲 和

I

ここ数年間のわが国の西洋近代史研究は、一九六〇年代からの混沌と模索の時期を脱して漸く新しい段階に入りつつあるように思われる。柴田三千雄『近代世界と民衆運動』（岩波書店、川北稔『工業化の歴史的前提』（岩波書店）、北原敦（他）『ヨーロッパ近代史再考』（ミネルヴァ書房）等の包括的な問題作が相次いで出版されたのは一九八三年のことであった。これらの作品に見られるように、かつてのマルクス主義史学乃至大塚史学を筆頭とする戦後歴史学が内包していた「完成された西洋近代」に普遍的価値基準を置いてそこからの距離によって「歴史的進歩」の度合いを測るという長い間の知的習慣から、我々ははっきりした形で脱却しつつあるといつてよいであろう。その証左は上に掲げた諸著作だけでなく、また本書刊行直後に出された良知力『青きドナウの乱痴気—ウィーン一八四八年—』（平凡社）にも認めることが出来よう。良知氏はウィーンの市壁リーニエの内と外に生きる

都市下層民、流民のいわゆる「プロレタリア」に温かい眼差しをなげかけながら、西欧近代社会の周縁にあって常にそこから排除されながらそれを支える彼ら「プロレタリア」から西欧近代社会を逆照射することによって我々に「近代」の意味を鋭く問い直している。これに対して本書『一八四八—国家装置と民衆』は、とりあえずは一八四八年革命の一時期に検討対象を限定しているけれども、視点は長期的なスパンをとり、権力と日常生活の関係を主眼にして権力—国家装置が日常生活を監視し規律づけ始めるヨーロッパ社会の国家—社会構造の質的転換を歴史的に明らかにしようとしている。この場合、一八四八年はこれら国家装置の原型を産み出したいわば契機、転換点あるいは分水嶺として位置づけられているが、それを経て何がどう変わったのかというと、その趣旨は極めて明解である。即ち、この時代を分水嶺として国家と社会の支配体系が、例えば軍隊を典型とするハードな物理的抑圧から学校、公衆衛生等の諸制度を媒介とするソフトな日常的監視・管理へと転換していくということ、これである。この観点は、言わずと知れたL・アルチュセール、M・フーコーの「国家のイデオロギー装置」論と「規律化・合理化」論を理論的な下敷きにしたものである。従つて本書から、日常生活の隅々にまでその権力体系を浸透させ、これに抵抗すべき物質的、思想的拠点をほぼ喪失させてしまったかの如き現代資本主義社会を過去に遡つて批判しようとする立場を読み取ることは容易であろう。

しかし、この現代社会の日常的管理の問題をテーマにした研究は、何も本書が初めてではない。既に喜安朗氏が一九世紀前半パリの民衆運動を論じる中で、民衆の自律的生活圏と國家のイデオ

ロギー支配との間の緊張関係を民衆の側から問題にしていた(民衆蜂起の打倒対象)『思想』六二九号一九七六年、『パリの聖月曜日』平凡社一九八二年所収)。これに対して本書が国家装置の側からこの問題を論じていることによって、ここに一八四八年を取り巻く国家と民衆の間の「ヘゲモニーとカウンター・ヘゲモニーの拮抗関係」を初めて両方の側から捉えることが出来るようになったとはいえよう。しかも、本書の利点はパリだけではなくベルリンをも取り上げることによって、これら首都の間の都市秩序体系の整備に関して比較の可能性をもたらしめたという所にある。ともあれ喜安氏の一連の研究とほぼ共通する問題関心を分かちながら、正面きって「国家のイデオロギー装置」論を一八四八年に適用しようとする本書の試みは、柴田氏前掲書や良知氏の近著とは一味違う西洋近代社会史像を提示している。

主たる対象がフランスに置かれている本書を論評するにはいささか役不足な私が敢て書評を思い立ったのは、とりもなおさず近年隆盛しながらも多様な方向に拡散しつつある社会史の状況にあつてこれに一定の距離を置きつつ、一八四八年を契機として「社会の深部にまで達する質的転換を」「構造的に把握しよう」と試みる(まえがき)本書の基本的態度に大いに魅力を感じたからに他ならない。そしてドイツにおける一八四八年革命と民衆運動に関心を持ってきた者として、フーコーやアルチュセールの権力論から引き出された国家装置からの視点、一八四八年革命の近代社会への転換点としての意味をどのように展開しえるのか、という問題に執着せざるを得なかったからである。従つて本稿では専らこの点に絞つて本書を読んでいくことにして、本書に収められた

広い領域に渉る個々の論稿についての具体的内容にまで立ち入った論評は各々の専門家の手に委ねることにしたい。

II

本書の構成は以下のようになっている。

阪上孝「序章 一八四八年をどうとらえるか」、I 阪上孝「工業化と都市の秩序」川越修「革命」と『安寧秩序』一八四八年ベルリンの市民軍をめぐって―見市雅俊「衛生経済のロマンス―チャドウィック衛生改革の新しい解釈―富永茂樹「統計と衛生―社会調査史試論―」、II 谷川稔「二月革命と『カトリシズム』上村祥二「二月革命と初等教育」、III 田中正人「共和主義と第二共和政」高木勇夫「二月革命と普通選挙」西川長夫「一八四八年革命とフランスの農民」小林清一「二月革命とフランス保守主義」、IV 村上信一郎「マツィーニの敵―イタリアにおける民族統一論と連邦論―」谷口健治「ドイツから見た二月革命―マルクス、シュタイン、マイスナー―」松原広志「ロシア専制派と革命―ロシアとヨーロッパの視点から―」

本書は編者の阪上氏によって執筆された『序章 一八四八年をどうとらえるか』を読むことによって、ほぼ全体の趣旨を理解することができるようになってきている。この『序章』は、「まえがき」によれば『共同研究』メンバー全体によってなされた討論の産物であるから、建前上は一三本の論文がそれぞれ生かされている総論とみなすことができよう。各論に相当するのは大きく四部に分かれて構成されているが、各部には表題がつけられていない。第一部では本書の主題に直接関係する一八四八年前後の警察機構・

市民軍・衛生制度・社会調査を軸にした都市秩序の再編制が選ばれており、パリ、ベルリン、そしてイギリスがその検討対象に選ばれている。これと同様に第二部も主題に直接関わる宗教と教育、即ちフランス・「カトリシズム」たる教会が公教育体系に如何に関わっていくのか、あるいは初等教育制度が民衆のブルジョワ・モラルへの訓導に如何に有効に機能するのか、といった問題を共に同じ法案を材料にして論じている。「國家のイデオロギー装置」を革命過程の中で扱う部分である。第三部はいくらか主題から離れがちであるが、フランス二月革命の政治過程をパリだけでなく農村を視野に入れたナショナルなレベルで論じることを主たる内容としている。第四部はイタリア、ドイツ、ロシアを扱っているが、ここではこれらの国にとつての、あるいはこれらの国から見ただけの、一八四八年革命の普遍的乃至特殊な問題が論じられている。とにかく一三本の論稿全てを一読しての感想は、かなりの疲労感を覚えるほどに力作が並んでいることと、主題を直接扱う第一、第二部を含めて各論文が程度の差こそあれ個人的な切り口を見せつけてくれることである。従つて各論文の内容紹介はここでは極力避けることにして、これまで述べてきた本書の視点、即ち国家装置からの視点が一八四八年革命のどのような解釈を可能にしたのか、この点を中心にして以下検討していこうと思う。

III

既に述べたように、一八四八年革命を国家装置からの視点で問題にすると、國家のイデオロギー装置が権力機構の中で果たす役割がこの革命を契機として増大した、という論点が本書の基本

的な一八四八年革命解釈である。しかし、それはこの革命の「意図せざる結果」(一六ページ)として産み出されたということであつて、けつしてこの革命の只中でブルジョワジーが主体的に闘い取つた所産ではないことが重要な留保条件になっている。革命は、七月王政下、あるいは三月前期に進行する工業化、都市化と共に発生しつゝあつた首都の『危険な階級』、職人労働者の社会的抗議といった慢性的な秩序不安定と社会的緊張にさいなまれて旧来の都市秩序維持装置が崩壊した、正にその瞬間に生起した。この点は、阪上論文を初めとして第一、第二部の各論文が比重のかけ方に差はあれ共通して指摘しているところである。このような革命前の社会的状況の分析については、おそらく誰もが首肯しようであらう。この情況に対応して工業社会に適合的なブルジョワ国家装置(家庭―学校、警察機構、衛生機構等)の創出・再編制、あるいはそれらの拡充・整備を必要とするのは論理的必然ではあつても、具体的歴史過程においては必ずしもそのまま順当に展開していくとは限らないことは言うまでもない。むしろそのような国家装置が歴史的に構築され、「単なる禁止と抑圧の権力から人びとを導き、操作し、管理する権力への移行が開始された」(一五ページ)のは、言うまでもなくフランスとドイツでは第二帝政下であつた。「意図せざる結果」として、という留保が付けられているのはこのような時間的位相差をおそらく考慮してのことであらう。一八四八年革命はこうした国家装置の構造的転換の論理的要請という文脈から、具体的歴史過程においてよりもむしろ論理的次元で「転換点」と位置づけられていると考えた方が先ずは分かりやすい。

しかし、だからといって本書を権力論の安易な歴史への適用で
 あると考えるのは、明らかに早計でしかない。一八四八年の固有
 の歴史的空間がそのような理論の安易な適用を拒絶しているし、
 また具体的な事例を個別に検討しようとしている各論文はそのよ
 うな歴史的制約を十分受けている。例えば、このことは第二部の

谷川、上村両氏の教会と教育、学校制度の改革法案を扱った論文
 の中ではっきりと指摘しうる。「カルノー法からフェルー法へと
 という劇的な反転現象を生じた背景」について、谷川氏は「普通選
 挙の導入にもなう政治的磁場の根本的転換と、それによって生
 じた地方農村を中心とする激しいイデオロギー闘争」、そして「五
 月一五日事件から六月蜂起にいたる民衆運動の爆発」(一八三ベ
 ージ)を列挙して、このような革命の政治的ダイナミズムのフラ
 ンス的特質に規定されて教会の新たな公教育体系における役割分
 担が模索されていくことを強調している。またパリ警察制度と革
 命直後に実行されたコンディエールの「調停の警察」の試みを検
 討している阪上論文は、ピールのロンドン市警察の改革にならっ
 たいわば新しいソフトな秩序維持装置とも言うべきこの実験が僅
 か二ヶ月半で幕を閉じることになる背景について、この組織自体
 が革命の政治力学のなかではすぐれて政治的意味をもたざるを得
 なかったことに触れている。また川越論文もベルリン市民軍の解
 体について論じている中で、この都市の持つ固有の社会的現実、即ち
 工業化の始動に伴う社会変動の影響を「受けすぎた」ことによ
 る「諸社会層の錯綜した重層的な絡み合い」という現実(一七三ベ
 ージ)の強調しつつ、これと未だ身分的社會觀念に色濃く彩られ
 たベルリン市民軍の制度的理念との間にあるギャップを指摘して

いる。このパリとベルリン両都市の革命期の秩序維持装置に関し
 てみても、それぞれが受けている歴史的制約の差異がそれぞれの
 都市社会の内実と革命の政治過程の特質として表現されている、
 と考えることができる。

従って、都市秩序の危機と再編という観点からパリとベルリン
 の両都市の秩序維持の在り方を比較してそれらの特質を析出しよ
 うとしても、両論文からその作業を行うのは相当困難であり、正
 直に言えば無い物ねだりに近い。両都市の比較を不可能にして
 いる最大の原因は、直接的には両論文の視点と比重の置き方のズレ
 にある。阪上氏がより「危険な階級」との関連で警察制度のイデ
 オロギー的側面に接近するのにならして、川越氏はより「ベルリ
 ン革命」それ自体に執着して警察、市民軍をこれに包摂される部
 分領域として扱っている結果、両者の比重は秩序維持の機能と技
 術から秩序維持の担い手とその客体の問題へと横方向にずれてし
 まっている。比較史的視点を確立するには厳密な理論的準備と資
 料の水準を必要とする以上、もとより容易なことではあり得ない
 が、本書の視点がすこぶる明解で魅力的であるが故にやはり残念
 な気がする。

残念な点をもう一つ。発生しつつある『危険な階級』に対応し
 て民衆の日常生活を標的とする道徳化、規律化の過程を分析しよ
 うとするとき、その対象を本書が扱っている学校教育制度のイデ
 オロギー的側面だけに求めるのは当然不十分である。阪上氏のい
 い方によれば『農業的定住から工業的定住への過渡期の最終局面』
 (一三ページ)とされる一九世紀前半は、都市に流入しつつある
 農村からの非定住人口と未だ職人氣質の強い労働者らのいわゆる

工業化を初めて経験しつつある第一世代が主要な社会的人口であった。これに対して学校教育制度と直接関わる彼らの子弟は将来的な規律正しい工場労働者として訓育していく限りで重要な規律化の対象ではあっても、この時代の規律化を直接促すべき『危険な階級』そのものではなかった。むしろ工業化第一世代こそこの時代の社会秩序の不安定と緊張を造り出していたのである。彼らは自分自身の生涯のなかで伝統的な不規則な労働の様式から、資本主義的工業社会に適合的な規則正しい労働の様式へと転換することを強制された世代であった。そしてその転換の強制は彼らの日常生活の全体にまで及んでいたのであるが、仕事場における強制はその要の位置を占めていた。こうして勤勉、節制、禁欲といった道徳の強制との葛藤が彼ら工業化第一世代を襲っていたのである。従って、この時代に相応しい規律化の場合は、学校だけでなくまた仕事場、工場の空間のなかにこそ求められなければならない。次第に成文化されつつある就業規則に表現される工場規律、あるいはモラリスト達によって喧伝される労働倫理を検討することが必要であろう。以上のような観点から一八四八年革命期の労働争議、ストライキ運動さらに仕事場の日常的な係争点を洗い出すことによって、労働の規律化を巡ってせめぎあう「社会の深部」のもうひとつの側面が浮き彫りになり、仕事場における規律化過程にとつて一八四八年がどのような意味をもっているのか、という問題が新たに拓けてくるように思われる。

以上、一八四八年革命のどのような解釈を本書の視点が可能にしたのか、という論点に限って検討してきた。その結果、当然の疑問として本書の表題の片方を占める「民衆」はこの国家装置の

変容・転換に対してどのように反応していったのか、という問題が新たに出てこよう。しかし、この問題には本書自体は殆ど答えようとはしていない。メンバリーの谷川氏の著書『フランス社会運動史』（山川出版社、一九八三年）を見ても思想的レベルでの追求に重点が置かれているため、実態として「民衆」を構成する諸社会集団が具体的にどのように国家装置の変容に反応していったのかは疑問のまま残らざるをえない。

IV

そこで本書の視点を逆転させて、「民衆」・「民衆運動」とつて一八四八年革命とは何であったのか、という視点を設定して本書を読んでみよう。

そのためには工業化によって解体しつつある「民衆」の内実について触れておかねばならない。本書のキー・タームのひとつである『危険な階級』の日常生活は貧困、不潔で密集した居住環境につきまとう病いによって支配されていたが、彼らがしてかす窃盗、詐欺等の犯罪行為は秩序当局にとって最も危険であるとみなされていた。この人びとが秩序維持装置の日常的監視・管理の最大の目標とされていたのに対して、高い社会的結合関係と自律的な労働規律を土台にしてアンシアンオンや労働者協会などを形成し、少なくとも「社会的共和政」をイメージするなど「カウンター・ヘゲモニー」形成に寄与したのは手工業的に熟練した職人的労働者の人びと（『開放的』熟練職人、七ページ）であった。この「民衆」内部の非均質的な構造は十分注意される必要がある。本書の各論文は同様に「民衆」という語句を用いながら、上述の

『危険な階級』と職人的労働者を混同しているくらいがある。一八四八年革命の一つの特徴として、最下層からエリート層に到る「民衆」の多様な存在、運動あるいは文化がこの時期最も先鋭的な形で表出し、その結果全体としては錯綜した運動の様相を呈さざるを得なかった点がしばしば指摘されるが、このことは本書のように国家装置からの視点で「民衆」を問題にする際においても十分考慮しておく必要があるのではないだろうか。まして「ヘゲモニーとカウンター・ヘゲモニーの拮抗関係」を捉えようとするのであれば、せめて『危険な階級』については国家装置からだけでなく運動からも追究がなされてしかるべきではなかったか、と思われる。

この点に関して少し触れておきたいのは、一八四八年革命と「民衆運動」の行動様式の変容との関係である。上で述べた問題を唯一扱おうとする田中論文をみると、実際には組織的行動を軸にした職人的労働者の運動が中心に論じられ、「自然発生的行動」を軸にした『危険な階級』の運動は残念ながら「おわり」で僅かに述べられているにすぎない(二五三ページ)。この時期の「民衆運動」は「民衆」の解体と共に各社会集団が次第にそれぞれ固有の行動様式をとりつつ未だ相互に結び付いている状態にあった。この結合関係が一八四八年革命を経ることによってどのように変化していくのか、という問題を検討するためには上述の社会集団それぞれに立ち帰っての具体的な実態分析がまずは不可欠であろう。この点を踏まえた上で、「民衆運動」の行動様式の変容を問題にするとき、「機動戦から陣地戦へ」、「街頭闘争の終焉」といった図式だけではいかにもお座なりといった感を拭えない(一六

ページ)。この変容は、勿論先にも触れた喜安氏の一連の運動史研究の主たる対象なのであるが、より長期的観点から「社会的抗議」の研究領域でも注目されている(G・リューデ『イデオロギーと民衆抗議―近代民衆運動の歩み―』法律文化社一九八四年)。その中で「抗議形態の合理化・近代化」論は、工業化と関連させて自然発生的運動から計画的・組織的運動への移行を問題にする。国家装置の変容を問題にする場合、喜安氏の民衆運動の自律性の論点と社会的抗議研究で問題にされる「合理化・近代化」論との論理的脈絡をそれぞれどのようにつけるのか、これはひとつの課題となるだろう。

V

本書の各論文はそれぞれに個性的な切り口を見せてくれると前に述べたが、とりわけ異彩を放っているのは、第四部の谷口論文と第三部の西川論文である。これらはそれぞれドイツにおける同時代人のフランス二月革命観と首都パリの革命の対極にあるフランス農村の状況を分析しているが、対象の違いを越えて両者は共通の論陣を張っている。即ち、長い間一八四八年革命の研究者にとって古典であり続けたマルクスの『フランスにおける階級闘争』、『ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日』によって媒介されてきた「定型的二月革命理解」を払拭し、これから解放されるべきであると主張する。西川論文は更にこの「定型的二月革命理解」を農民に視座を据えることによって問い直し、フランス農民にとって一八四八年革命とは何であったのか、という問題設定の重要性を指摘する。まことに正当な論陣であるというべきである。

『共同研究』としての体裁をとる本書の成り立ちからすれば、これらの主張は全体の主題にとってアウトサイダー的位置を占めており、いささか不協和音を醸しかねない、という感じもするが、むしろこの場合の不協和音は本書のメリットと見なしうる。

本書が『共同研究』の困難さをデメリットとして表白しているのは、むしろ本書の主題自体を扱う第一、第二部の各論文が必要なら相互の脈絡を時に失っていることである。このことが最も深刻なのは、先述したように「民衆」の扱い方にずれがある点であろう。とりわけ『危険な階級』は国家装置の問題を論じる際には常に前面にあつたのに、民衆運動を論じる際には、全くと言ってよいほど姿を見せてはくれない。本書全体の問題関心が国家装置と民衆の拮抗関係にある限り、やはり両者の連結環たる『危険な階級』は一貫して検討される必要があつたのではないか。各論文が個性的な色彩をもつことと、『共同研究』として相互の脈絡をつ

けることとの両立が、いかに難しいかを痛感せざるを得ない。

しかし本書はすこぶる明快な国家装置からの視点を打ち出すことによつて、一八四八年を現代管理社会の歴史的起点として捉えることを可能にした。この意味で一つの鮮明な「西洋近代」史像を読者に提示してくれることは間違いない。それにしても一八四八年革命に対する研究姿勢の時代変化に驚かすにはいられない。かつての革命研究には程度の差こそあれ革命へのある種のロマンティズムが伴っていたが、本書においてはそれがついに無くなつたという印象をもつのは評者だけであろうか。そして、革命は反対に「意図せざる結果」として強大でしかもソフトな国家装置を産み出したのだ、という議論の背景にこれまたある種のペシミズムを評者を感じるのには皮相的に過ぎるであろうか。

(A5版 四四二頁 一九八五年九月 ミネルヴァ書房 五〇〇〇円)

(立命館大学非常勤講師)